

## *The Heart of the Matter* の実存思想

——「私の欲している善はしないで、欲していない悪は  
これを行なっている」(「ロマ書」第7章19節)——

船 木 満 洲 夫

(1)

スコウビーが自殺したあとヘレン・ロルトは痛切な孤独感に陥る。バグスターであれだけであれ、肉体を求めれば拒む理由がないように思う。愛する者がいないと知って暗闇の中で孤独になった彼女は、今や神を信じたい気持ちになる。こうした孤独は、実存的と呼ぶにはその受動性がいささか妨げになるかもしれない。

ところがもともと主人公が暗闇の中の孤独を経験している。組み立て住宅に初めてロルト夫人を訪ねて、住宅のドアをノックする前のことだ。

It seemed to Scobie later that this was the ultimate border he had reached in happiness: being in darkness, alone, with the rain falling, without love or pity. (p. 135)

後になって、これこそが自分の到達した幸福の究極だと、スコウビーには思われた——ただひとり雨の降る暗闇の中に、愛も憐れみもなしにいたことが。

ヘレンが暗闇の孤独を味わったのが彼の死後であるのとは対照的だ。ヘレン初訪問から立ち去るときは非常な幸福を感じながら、そちらの方は幸福としては思い出せなかったスコウビーにとって、彼女と関りをもつ以前の孤独こそが幸福の究極の境地だったのである。ここには愛や憐れみが不幸をもたらすことが暗示されているが、そのことはすでに妻ルイズとの間に重くのしかかっていることで、彼はこのあとヘレンに対しても憐れみと責任を感じるようになる。他人には幸福、自分には死への苦しい道程の中で孤独が深化する。

最悪の事態を前に孤独がスコウビーと向かい合って坐る。‘you and I’ (p. 235) と話しかけてくる仲であり、最後にエヴィパンの錠剤を手にした彼が ‘I am absolutely alone’ (p. 264) と思ったとき、声をもつ孤独は錠剤を棄てると言う。神の内面の働きかけと解することができよう。スコウビーの孤独への性向はこの作品で見逃せないこと。実存の心情はいつも孤独を求

めるのであり、孤独への衝動は精神を測る尺度なのだ。<sup>(1)</sup>その孤独の源泉が、自分の重荷を委ねるべき神がないという追放感にあるという見方も可能だろう。<sup>(2)</sup>

この絶対の孤独という氷点が絶望と関る。

Despair is the price one pays for setting oneself an impossible aim. It is, one is told, the unforgivable sin, but it is a sin the corrupt or evil man never practises. He always has hope. He never reaches the freezing-point of knowing absolute failure. Only the man of goodwill carries always in his heart the capacity for damnation. (p. 60)

絶望は自分に不可能な目的を課することに支払う代償である。それは許されぬ罪だと言われるが、腐敗した邪悪な人間には実際に縁のない罪だ。そういう人間は常に希望をもっている。絶対的な失敗を知るという氷点に達することはない。善意の人間だけが常に心のうちに、絶望による墮地獄の可能性を抱いているのだ。

意識の問題として絶対的な失敗と絶対の孤独が通うのであり、ここに予示されるように、自殺という許されぬ罪が絶望の最後の表出であること、地獄が永遠の喪失感であることを教会の教えで知っているスコウビーは、ついに地獄墮ちの罰を神に捧げる運びとなる。

絶望は実存思想からすれば、神との関係に立つ不可欠の条件である。キルケゴールの『死にいたる病』によれば、絶望とは自己自身に対する関係に分裂が起こることであり、重要なのは神との関係だ。永遠者や自己自身から脱け出ること無に帰することもできない、そこに絶望が存する。自己の無限化による解放と、自己の有限化による還帰がなされない限り、自己の絶望の状態はつづく。<sup>(3)</sup>スコウビーの最後の選択は絶望からの逃避と言えようが、その宗教的と思えるほどの自己犠牲において、神との関係は一体どうであったのか。それに入る前に彼の罪の意識と苦悩について吟味しておかねばならない。

(2)

*The Heart of the Matter* のエピグラフは、フランスのシャルル・ペギーの言葉——「罪人はキリスト教の核心そのものの中にいる。罪人ほど教えについて知る者はいない、聖人を除いては」。物語が始まってほどなく、次のようなスコウビーの内面描写がなされる。

I've landed her here, he thought, with the odd premonitory sense of guilt he always felt as though he were responsible for something in the future he could'n't even foresee. (p. 17)

予知し得ぬ将来のことに対して自分に責任があるかのように、いつも感じていた不思議

な予告的な罪の意識をもって、おれは彼女（ルーズ）をここ（西アフリカのイギリス領）に連れてきたと彼は考えた。

愛する者の幸福に対する責任を常に自覚するスコウビー。自分の人生も信仰も無意味のように感じるスコウビー。彼はヘレンと関係をもって犯罪者のようになる。罪と同時に二人の女性に対する互いに矛盾する責任を引き受けることは、二人以外の別の存在を彼に意識させずにはおかない。

罪ある主人公の思考はこうだ。

I am cheating human beings every day I live, I am not going to try to cheat myself or God. (p. 221)

おれは生きていて毎日人間をだましている、おれ自身あるいは神をだまそうとはすまい。

自分と神との連係に注目したい。内部に腐敗をもち歩き、神が宿っている自分の体は腐りつつある——この腐敗が体臭のように苦しみをふりまくのだ。*A Burnt-Out Case* の信心家ぶったパーキンソンは、腐敗を鱗のように皮膚につけてもち歩くが、生体腐敗の自意識の欠如においてまるで異なる。自分の罪の範囲や答えを知っているスコウビーは、自分だけが罪人だと神に話しかける。規則違反、姦通、密輸行為、殺人のまきぞえ、神聖冒瀆等、この警察副署長はプロットの上で公的にも私的にも罪を犯すが、彼の情欲のない姦通や殺意のない殺人とちがって自殺は用意周到に実行する。内面の罪の意識による地獄堕ちの自殺と言ってよい。

ところでルーズにもヘレンにも、スコウビーの憐れみと責任感が高まるのはその醜さに対してだ。しかも彼の憐れみは宇宙的な規模にまで広がる類のもの。

If one knew, he wondered, the facts, would one have to feel pity even for the planets? if one reached what they called the heart of the matter? (p. 124)

もし事実を知ったならば、もしいわゆる事物の核心に到達したならば、星に対してさえ憐れみを感じなければならないのだろうか、と彼は思った。

スコウビーの‘the heart of the matter’は、宇宙的な苦しみと絶望に通うもの。*A Burnt-Out Case* の主人公の‘the heart of the matter’は、トマ神父が読むパーキンソンの記事に書かれているように、‘a completely selfless love’ (p. 140)にあるかどうかは疑問で、およそ苦しみや憐れみと本人は無縁な立場をとる。スコウビーの憐れみは、経験する者がほとんどないようなとっぴょううしもない激情。こうした憐れみをもって途方もない責任を身に引き受けること、これは実存的な苦しみと言ってよいのではなからうか。相手が憐れみを欲するかどうか

は問題ではない。その憐れみは次のように叙述される。

Pity smouldered like decay at his heart. He would never rid himself of it. He knew from experience how passion died away and how love went, but pity always stayed. Nothing ever diminished pity. The conditions of life nurtured it. There was only a single person in the world who was unpitiable, oneself. (p. 178)

憐れみは彼の心の中で腐敗物のようにくすぶっていた。彼から憐れみがとり除かれることはないだろう。情熱は消え去り愛はなくなるが、憐れみは常にとどまることを彼は経験によって知っていた。憐れみを減じるものは何もなかった。生の条件がそれを養育するのだった。この世に憐れみ得ない人間がただ一人だけいた——自分自身だ。

苦しみに対する心の働きが憐れみであり、同じように腐敗した否定的なもの。このスコウビーの憐れみが、神との関係から生じる愛に基づくものでないことは確かだ。彼が神を憐れむまでに至ったとすれば、結果的に高慢とエゴイズムのそしりを免れないであろう。責任の重荷を委ねずに自ら担って果てるところに、吟味を要する神との特殊な関係が含まれている。いずれにせよ、基底にある罪の意識がキリスト教のそれであることは疑いない。生きているそのことが罪であり苦しみを生む。

(3)

実存の眼目は主体性にある。キルケゴールの『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』が手がかりになるだろう。もしキリスト教の教理ではなくて神とどう関るかが問題だとするならば、もし主体的に実存に生きる者は自分自身の思考のただ中に身を置き、不確定性の形でしか確定性を保持し得ないとするならば、もし神は主体的に内面性に徹する者のみが出会うことのできる存在であるとするならば、スコウビーの生き方にはそれとして実存の主体性がある程度認められるのではなかろうか。思考は空想や感情より高い次元でなくて、それらと同列のものであること、<sup>(6)</sup> 実存は罪として強調され永遠は神として強調されることも考慮に入れてよ<sup>(7)</sup> かり。スコウビーの場合、自分自身のうちに一貫性をもつとともに、いっそう高次元のもののうちに一貫性をもっているとすれば、<sup>(8)</sup> 実存の本質性に通うと言えるだろう。

*The Heart of the Matter* には、主人公の死んだ娘キャサリンのことが伏線になっている。船の浴室に規則を犯して娘あての手紙を隠していたポルトガル人の船長から、娘があればわかってもらえるだろうと言われ、その娘の話が ‘turning point’ (p. 56) になったことを自覚するスコウビーだ。長い年月書きとめた日記には、C が死んだとだけ書いてあり、その巻を開くことが決してなかった。子供が死んだとき彼はアフリカに来ていて、死に目に会わずにすんだことをいつも神に感謝していた。その彼が、ヘレン・ホルトと同じ船に乗っていた6歳の死

にかかった少女の、かすれ声で「お父さん」と繰り返す眼を見て恐怖を味う。キャサリンが死んでからはだれも愛していないとルーズは夫をなじる。父親としての愛情が、一人の人間の何にも替え難い感情であることは確かで、娘の死が主人公の心情のルーツと言ってよいかもしれない。

スコウビーの抑圧された意識は、あの6歳の少女の頭に白い聖体拝領用のヴェールがかかっていると錯覚したのだが、妻が南アフリカから帰ってきたとき家の二階のドアからのぞいたのは、同じヴェールをかぶって見返している顔(娘の写真)であった。死者が彼につきまとう。失ったものに対する愛の意識はぬぐえない。教会の告解室で、彼の目に浮かんでは何であったか。

It was not Helen's face he saw as he prayed but the dying child who called him father: a face in a photograph staring from the dressing-table: the face of a black girl of twelve a sailor had raped and killed glaring blindly up at him in a yellow paraffin light. (p. 220)

彼が祈るとき目に浮かんではヘレンの顔ではなくて、彼をお父さんと呼んだあの死にかかった子供であり、化粧台からじっと見つめていた写真の顔であり、水夫に凌辱されて殺された十二歳の黒人の少女が、黄色いパラフィンの光の中でやみくもに彼をにらみつけていた顔であった。

死者の面影がこびりついて主人公の苦しみは深まるばかり。彼の憐れみと責任感、人間の苦しみ<sup>(9)</sup>を敵とする鋭敏な感覚から生じていると言ってよい。現実を離れて実存はあり得ない。

『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』によれば、宗教的実存は苦悩をその内面の本質とし、まさしく苦悩を呼吸して生きているのであり、苦悩の欠落は宗教性の欠落を意味する。苦悩とは神との関りに立たされていることの表現であり、自己は神の前に無となって立つという課題を負うのである。苦悩がスコウビーの自己否定に貫かれた内面の行動を決定づけている。‘the reflection of another's pain’ (*A Burnt-Out Case*, p. 79)を感じるだけでなく、人に対しても神に対しても苦悩を呼吸していると読めるではないか。「被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに苦しみつづけている」(「ロマ書」第8章22節)——このことを体得しているように思われる。罪に対応するのは主体の内面の真剣さであり、それは心情の根源性<sup>(11)</sup>と言える。

(4)

神の創造物を愛するほどの人間性をもたぬ神は信じられない、創造物の一人を犠牲にしてまで神を愛することはできないと考えるほど、スコウビーは造物主の神に現世の側に立った対し

方をする。本人にはわたらなかったヘレンあての手紙で、彼女を神以上に愛していると書いて神を見棄てたと自覚する彼は、一方で神の苦しみを理解し、キリストは苦しみのために自殺したと考える。

しかし苦しむだけで落ちることのない神よりも、自分を必要とする二人の女性に苦痛を与えない方を選び、こうして自分のために傷ついている二人から遠ざかるとともに、同じように傷ついている神のもとからも永久に去ろうとする。次の文章はどうであろうか。

As for God he could speak to Him only as one speaks to an enemy — there was bitterness between them. He moved his hand on the table, and it was as though his loneliness moved too and touched the tips of his fingers. ‘You and I,’ his loneliness said, ‘you and I.’ (p. 235)

神はどうかと言うと、彼はただ敵に話しかけるようにしか話しかけることができなかった——両者の間には苦々しさがあった。彼はテーブルの上で手を動かした。すると彼の孤独も動いて彼の指先に触れたかのようなようだった。「おまえとおれ」と彼の孤独は言った、「おまえとおれ」。

対等なほどの近しさであり、せっぱつまったときに彼の孤独の声となって現われる神、その神にスコウビーは最後の意識もうろうとした中で、‘Dear God, I Love ...’ (p. 265) と声に出して言う。この世における親密さがついに神の愛の余韻をあの手へとひびかせる。自分を十字架だと考えたり神を失敗者だと見たり、主人公にとって神あるいはキリストは、最後まで彼と同等の犠牲者であった。ランク神父が言うように、スコウビーは神の慈悲を信じなかったのではなからうか。そうでなければ、地獄堕ちの方途を選ぶこと自体おかしいことになるだろう。作者がどう考えたかは別問題であり、神は「自分の慈悲を施そうとする者に慈悲を施す」（『ロマ書』第9章15節）のである。神父が話すようにスコウビーが神を愛したとすれば、この世の人を愛したことと重なる範囲の意味ではなからうか。

こわれたロザリオという象徴が無視できない。ずっと前に修繕しておくべきロザリオを、彼はボーイのアリを呼び出すためにシリアの商人ユーゼフにわたし、そしてアリの死体のあたりにそれを探しながら、彼は神を殺したと思うのである。神との疎通の不首尾を表わすだろうし、アリを裏切り神を裏切ることになった主人公自身の危機意識をほのめかす面があろう。二人の女性への憐れみが矛盾するだけでなく、神に対しても相容れない彼の生き方ではないか。

スコウビーは人間の側に立って神を愛するが信頼はしない。霊的な次元と人間的な次元との緊張関係の中で、神の働きを苦しみの源と見るにしても、神に反抗して敗れたと解するにしても、主人公にとって神が何であったかが肝心な点になろう。<sup>(12)</sup> 全く個人の感情で神と独立した立場をとりながら、自ら犠牲になることによって神あるいはキリストに倣い、その役を演じる結

果に至るのだ。その行動が尊大だとしても、苦しむ神との近しさを考慮に入れなければならぬ。彼の手中に入ったり彼がなぐったりできるほどの神である。教会のきまりとの対立を深める一方、神との対話が直接的なものとなり、神が彼の助力を必要とする一個の人間のような存在になる。超越的な全能の神ではない。このようなのがキリスト教の、もしくは実存思想の神と言えるかどうかは疑問だろうが、しかしスコウビー独自の神の存在が確固としていることは事実だ。

神と人間とは質的に絶対に異なっているから、神との関りの行きつくところは崇拜だとすれば、<sup>(14)</sup>そして直接的な神との関りは何ら神との関りではないとすれば、<sup>(15)</sup>スコウビーの場合はどうだろうか。神にとっては一切が可能であるとすれば、<sup>(16)</sup>そして神にはあまりに近づくことはできないし、<sup>(17)</sup>あまりに近づくことは神から遠ざかることであるとすれば、スコウビーの関り方は問題であろう。キリストについては何も知り得ないし、キリストは逆理であり信仰の対象であるとすれば、<sup>(18)</sup>スコウビーのキリストの近さは問題であろう。ただ彼がキリストの痛みを感じ、キリストの範例に倣い、自分自身を否定する試練を貫いたのは、独特の信仰の厳しい論理に従った個体の生き方であったと言えるか。彼は彼として神と永遠のことを理解していたのだが、一貫してこの世の側の人間として生きた。スコウビーが好んだこの植民地がどういうところであったかが思い起こされる。

Nobody here could ever talk about a heaven on earth. Heaven remained rigidly in its proper place on the other side of death... (pp. 35—36)

ここでは地上の天国について話す者などなかった。天国は死の向こう側のあるべき場所に厳然ととどまっていた。

以上のように(1)孤独と絶望、(2)罪の意識（憐れみと責任）、(3)実存の苦悩、(4)神との関係に検討を加えてきたが、次にグリーン最後のカトリック小説と目される *A Burnt-Out Case* に当たってみることによって、そこから逆に何らかの照明が投げられることを期したい。

(5)

*A Burnt-Out Case* は13年後の作品。主人公の建築家ケリーの以下のような言葉に接したら、もしかしてスコウビーの再現ではないかととられるかもしれない。

I suffer, therefore I am. (p. 195)

われ苦しむ、故にわれあり。

Perhaps it's true that you can't believe in a god without loving a human being

or love a human being without believing in a god. (pp. 119—120)

人間を愛することなしに神を信ずることはできない、神を信ずることなしに人間を愛することはできない、ということはたぶん本当なのだろう。

このようなデカルトのパロディーや、「ヨハネの第一の手紙」(第4章20節)のアルージュンが吐ける人物だ。むしろ作者の意中がほの見えるかもしれない。ところがこのベルギー領コンゴにやって来たケリーは、自分のことをどう説明するだろうか。すべてはおしまいだ。苦しみも憐れみも感じない。人間は自分の領域ではない。欲望も天職もおしまい。何の関心もない。向こう側の無へ突き抜けてしまった。祈りもやめてしまい何も信じない。どんな神も、靈魂も永遠も信じない。縮約するとざっとこんなぐあいのケリーをトマ神父は深い信仰の人、へりくだった人、心の乾燥 (aridity) に苦しんでいる人と見る。この神父は信心家づらをしたリッカーや、いいかげんなジャーナリストのパーキンソンと同様にケリーを理解していない。理解しているのは無神論者のコラン博士や神学院の院長。

「燃えつきた患者」というのは、もともと治癒した癩患者デオ・グラチアスのことを指して医師のコラン博士が言った言葉だが、デオ・グラチアスを博士から従僕としてあてがわれたケリーに当てはまる。この土地へ来た最初の夜、自分が癩患者になった夢をみるだけではない。脱落癩患者を自認するケリーにとって、プロットの上で大きな転機となるのが、密林の中でデオ・グラチアスといっしょに一夜を過ごしたことである(第二部)。そのとき従僕が口にした「ペンデレ」(‘Pendélé’)という原始的な純真無垢な場所を主人公は求めるようになるのであり、ホテルでの一夜、彼がマリー・リッカーに語る童話がコンゴへ来た彼の過去の心境を伝えるのととも(第六部)、デオ・グラチアスとの密林の一夜はケリーの内面を追う重要な手がかりになろう。コラン博士からも「燃えつきた患者」の一人かもしれぬとされる、そのケリーはパーキンソンとの会話で、治癒するまでに食いつくされるだけのものをすべて失う癩患者のことだと説明する。そうでない者が伝染力をもつものに対して、自分は治癒して安全でもう何の害も与えないとケリーは考える。この治癒した幸福な主人公は結局、妻を奪われたと思いこんだリッカーに射殺される。こうだったのかと言わんばかりに自分自身を笑って死ぬのだが、神学院の院長とコラン博士の間で意見が交わされるように、ケリーが信仰を再び見出し始めていたのか、それとも単に生きる理由を見出し始めていたのか気がかかるところ。その最後の言葉‘this is absurd or else..’で言おうとしたもう一つのことは、おそらく神の意志に関わるのだろうが、そうだとすれば一体どういうことになるのか。

ここで単純な疑問を投げかけてみよう。苦しみを全く感じない生活があり得るのか。苦しみがなければなら信仰も失われている。すべてが治癒するものだろうか。ケリーが「燃えつきた患者」であるならば、行きつくところまで行ったケリーを、そういう患者と決めこんで追いやることもできよう。しかしケリーの言葉は額面通りには受けとれない。治っているとと言っても地



上の成功からは必ずしも治っていない。神を信じないと言うとき、神学の教理は信じないととれないこともない。癩患者のための仕事もデオ・グラチアスとの親近関係も、人間感情のの喪失者には不可能であろう。作品の冒頭の日記帳に書いたデカルトのパロディーが、あとで上の引用のように ‘I suffer, therefore I am’ と変化するまでに発展があるにちがいない。従僕を探して密林の中に入ることは、他の人間への関心と自分の心の探究を意味するだろうし、ペンデレを求める方向は信仰に通うことも考えられよう。とすれば、ケリーの口にする理論とその生活の内実の間に不一致があることになり、多くの理屈ばしった議論が表面に浮いてしまって、作品の底面で別の進行がなされているように思えてくる。最終部に挿入される童話もそうだが、うまくかみ合わないところがこの小説には残るのである。

*The Heart of the Matter* と比べてどうかという点が私どもの関心だ。主人公はいずれも謎めいた人物で、それぞれを死に追いこむヘレン・ホルトとマリー・リッカーは、魅力的でなく子供っぽいところがどことなく似ている。しかしスコウビーが異常なほど意識した罪も苦しみも、ケリーには無縁な点が根本的なちがいだ。癒し得ないものを保持したスコウビーの変容とは思えない。神のない現代世界における原初への探究のまた別の試みであり、主人公は意外とキリスト教の美德を示し得ている。その試みは *The Heart of the Matter* と比較して、キリスト教の実存から遠ざかるものではないか。スコウビーの ‘Dear God, I love...’ をケリーの ‘this is absurd or else...’ と並べれば、作品における神との親疎がおのずから読みとれよう。ケリーは自ら求めて苦しい人間の状況にじかにかかり合い、他人に奉仕することも笑うことも痛みを感じずることもとりもどし、最後には神を見出したとすれば、それはそれとして一つの精神の再生と言えるかもしれないが、キリスト教実存思想からすれば、不信から信仰への道はそう近くはあるまい。グリーンはこのあと宗教よりも人間の現実生活の方へいっそう創作の関心を深める。グリーンの小説は無私の方向をたどるのが顕著な点で、最後は暗示にとどめることが少なくない。死後のこと、神の意志はわからないが、わからないにも拘らず神と相対するのではなくて、どこまでも現世のわく内で作者の手法が発揮される。無か神かの二者択一を究極的に読者に迫るとすれば、グリーンのカトリック小説はそれでよしとすべきか。

\* \* \*

本稿中の *The Heart of the Matter* および *A Burnt-Out Case* から引用のページ指示は Penguin Books 版による。

#### 注

Samuel Hynes (ed.), *Graham Greene: A Collection of Critical Essays* (Prentice-Hall, 1973) (12) R.W.B. Lewis, *The ‘Trilogy’*, p. 72.

A.A. DeVitis, *Graham Greene, Revised Edition* (Twayne Publishers, 1986) (13) pp. 92–93.

Daphna Erdinast–Vulcan, *Graham Greene’s Childless Fathers* (Macmillan Press, 1988) (2) pp. 46–47.

Anne T. Salvatore, *Greene and Kierkegaard: The Discourse of Belief* (The University of Alabama Press, 1988) (4) p. 79.

Jae-Suck Choi, *Greene and Unamuno: Two Pilgrims to La Mancha* (Peter Lang, 1990) (9) p. 103.

キルケゴール『哲学的断片への結びとしての非学問的あとがき』（白水社『キルケゴール著作集』7, 杉山好・小川圭治訳）(5) pp. 32, 129—130, 318.

同上（『著作集』8, 同訳）(5) p. 29, (6) p. 287, (7) pp. 297—298, (10) p. 194.

同上（『著作集』9, 同訳）(10) pp. 84—139, (14) p. 53, (15) p. 300.

キルケゴール『不安の概念』（『著作集』10, 氷上英廣訳）(11) pp. 23, 217, 220, etc.

キルケゴール『死にいたる病』（『著作集』11, 松浪信三郎訳）(1) p. 92, (3) pp. 23—44, (8) p. 153, (16) p. 56, (17) p. 164.

キルケゴール『キリスト教の修練』（『著作集』17, 杉山好訳）(18) p. 41.

〔注番号が重複する場合は両方に関係する〕